

基礎・基本の定着を図り学ぶ意欲を高める歴史学習の工夫

— 年表の効果的な活用を通して —

手塚明浩¹

各種調査結果などから、歴史の大きな流れをとらえさせる学習指導の充実が求められている。本研究では幾つかの時代にまたがる身近なものの歴史を調べることで、時代区分や時代の特色などの基礎的な知識の定着を目指すとともに、歴史を大観的にとらえ、歴史の様々な見方や考え方に気付かせ、学ぶ意欲を高める歴史学習の工夫について研究した。

はじめに

現行の学習指導要領では「生きる力」の育成を目指し、社会科においても「覚える社会科から自ら学び自ら考える社会科」への脱却が図られている。しかしながら、生徒は歴史の学習というと、教科書の重要語句とその説明文を結びつける学習に力点を置いている。その手段は暗記であり、辞書的な説明ができるように努力している。ただそのようにして得た記憶は一時的なものであって、それは「知識」とは言えず、単なる「語句」でしかない。知識とは「様々な意味を伴い、納得に支えられて初めて『知識』となる」(吉川2007)というように考える。

そこで、歴史学習において基礎的な知識を習得するだけでなく、その活用を通して様々な意味を伴った知識に高めていくための工夫を探った。植村(1992)は「基礎・基本」について、「『基礎・基本』の意味するところは時とともに変化しており、『基礎・基本』の重視を唱える人々は一体どのような意味においてそのことばを用いているのか、それを明らかにする必要がある」と述べている。本研究では「基礎的な知識の習得とそれを活用する技能」を目指すべき「基礎・基本」とした。

また、生徒自身が自ら学び自ら考えるために、主体的に歴史学習に取り組む工夫を探った。自分の興味・関心に応じた学習主題に取り組む作業的な活動や、ICT機器を活用して、歴史の大きな流れをとらえ、歴史の様々な見方や考え方に気付く中で、学ぶ楽しさや達成感を実感しながら学ぶ意欲を高めるようにした。

研究の内容

1 歴史的分野の現状と課題

「平成15年度小・中学校教育課程実施調査教科別分析と改善点」によると、歴史の大きな流れをとらえさ

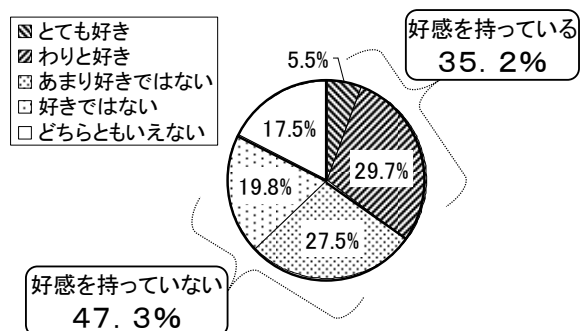
1 厚木市立荻野中学校
研修分野(社会)

せる学習指導の充実が求められている。神奈川県においても、「平成18年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査結果のまとめ」によると、歴史の大きな流れや各時代の特色についての知識や理解に課題が残ると指摘されている。このように各種調査結果から歴史的分野の課題として、歴史の大きな流れをとらえさせる指導が挙げられ、年表の活用が求められている。

2 生徒の実態

生徒の歴史学習に対する意識と時代区分や時代の特色などの基礎的な知識についての調査を、7月に所属校対象生徒(2年生3クラス91名)に行った。歴史学習に対して好感を持っている生徒は35.2%と約3分の1程度で、逆に好感を持っていない生徒は47.3%と半数近くにも達した(第1図)。好きではない理由として「覚えることが多い」や「暗記がうまくできない」などで、好感を持っている生徒の中にも「歴史は好きだけど覚えるのが大変だ」との感想があり、依然として歴史学習は暗記教科という印象が強いことが伺える。

歴史の学習は好きですか



第1図 歴史学習に対する意識

3 研究の方法

本研究のねらいは、歴史の大きな流れをとらえ、歴史的事象を断片的でなく、歴史の流れの中に位置付けることを目指している。生徒自身が関心ある学習主題を設定しまとめる作業的な活動を通して、歴史の大き

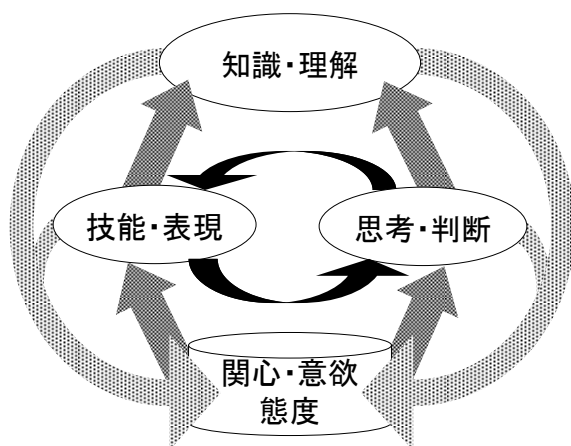
な流れを理解し、時代区分や時代の特色などの基礎的な知識の定着を目指すとともに、歴史学習に対する興味・関心を持ち、学ぶ意欲を高めるようにした。

まず、1年生の歴史学習の導入時に学習した、時代区分や時代の特色などの基礎的な知識を、2年生の歴史学習のまとめ、振り返りの学習活動の中で活用することにより、様々な意味を伴う確かな知識として定着できると考えた。

また、生徒自身が関心ある主題を設定して、資料を用いて調べた結果をまとめる作業的な活動は、学習指導要領では歴史学習の導入時に行うことを原則としているが、次のような効果を考え、2年生のまとめの時期に行うこととした。第一に小学校の既習事項に中学校での学習が加わり、より広い視野で歴史の流れをとらえられる。第二に歴史学習の振り返りの中で、身の回りのものや、私たちの生活と関わりの深いものの歴史をたどることにより、歴史を身近なものとしてとらえ、自分なりの歴史に対する見方や考え方が形成される。

この作業的な活動の過程は、社会科の4つの観点から構成することができる。奥田（1992）は「『興味・関心』や『意欲・態度』は学習の入口であり、それに支えられながら調べたり、探したりするのに必要な学習能力が『思考・判断』であり、その成果として身に付けるのが『技能』であり『知識・理解』である」と述べている。この考えに基づいて、学習の入口として興味ある学習主題を設定し、興味に促されて必要な資料を収集し、自分なりに解釈したことを年表に表現する。その上でさらに思考を繰り返すことにより、それが「そうか、わかった」という「知識・理解」につながる。このような学習の過程をとることによって、また新たな「興味・関心」を生みだし、学びを深め、意欲を高めるようにした（第2図）。

次に、中学校で行われる通史学習で「歴史の大きな流れ」をとらえるには、各事象が因果関係を持ちながら、歴史の流れの中に、複雑に存在していることを理



第2図 学習の過程に沿った観点の配列

解させることが必要であることから、時間の経過を表現するのに適当である年表を活用した授業の展開を考えた。歴史を大きな流れでとらえるための留意点は、年表の限られたスペースに一目で分かるような視覚的な工夫が必要であるため、あまり多くのことを網羅しすぎないことである。今回の年表活用のねらいは「歴史の大きな流れ」をとらえることである。そのためには様々な角度から歴史を眺めて「時代の移り変わり」に気付かせることが大切であると考え、個々の生徒によって作成された主題の異なる様々な年表を比較することで、「時代の移り変わり」に迫るようにした。

4 検証授業

検証授業は、所属校2年生3クラスに対して10月中旬に実施した（第3時については1月に実施）。本単元の「身近なものの変化をみてみよう」は、我が国の歴史について、作業的な活動を通して、歴史を大観的にとらえて、これまでに学習した基礎的な知識を活用しながら、歴史の様々な見方や考え方に気付かせたいと考え、第1表のような指導計画に基づき、検証授業を展開した。

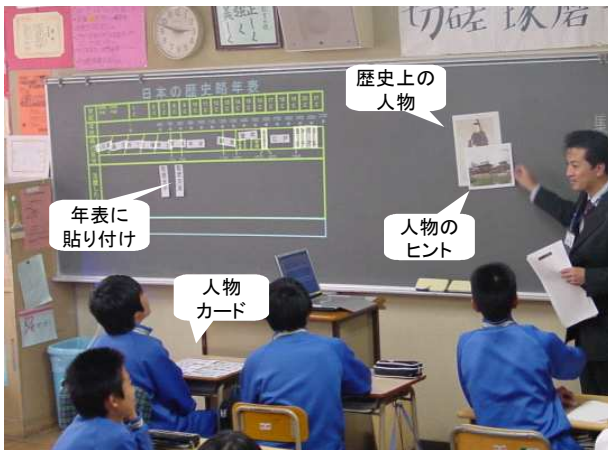
第1表 検証授業の流れ

単元名 「身近なものの変化をみてみよう」		
10月	第1時	歴史の大きな流れを考えよう
		歴史の流れをとらえるために時代の移り変わりを理解する
	第2時	ものの歴史を調べよう
1月		調べ方やまとめ方を学び主題設定して調査計画を立案する
	第3時	ものの歴史を調べよう
		調べたものを年表にまとめ歴史の様々な見方・考え方に気付く

(1) 第1時検証授業

略年表をプロジェクタで黒板に投影し、時代区分名や歴史上の人物のカードを黒板の略年表上に貼付させて時代区分を確認した（第3図）。黒板上に時代区分のカードを並べ、一覧することで各時代区分の名称と順序を再確認した。時代区分を歴史上の人物と関連させて、語句のみの暗記ではなく、代表的な人物から連想する時代背景を伴う時代認識を持たせることがねらいである。

検証授業では政権担当者を通して見た歴史の大きな流れをとらえさせるために、各時代の政権に携わった代表的な歴史上の人物を選択して、その人物の身分や立場から、時代の移り変わりや時代の特色を考えさせた。



第3図 略年表を使った授業の様子

電子マネー クレジットカード 白銅貨 初の二万円札発行	新貨条例「円・銭・厘」 紙幣の登場「藩札」 寛永通宝 永楽通宝(明) 秀吉が大判つくる	洪武通宝(明) 乾元大宝 和同開珎 開元通宝	この間国内で鑄造されず 皇朝12銭	稲や布の物品貨幣 遣隋使が行われる			
年代	700	1200	1600	1900	2000		
特色	米・布の使用	皇朝12銭の時代	宋銭・明銭の時代	寛永通宝の時代	洋式貨幣の時代	高額紙幣の時代	コンピュータの時代
時代	古代		中世	近世	近現代		

第4図 お金の歴史

次に、生徒自身が歴史の大きな流れをとらえる手段として、自身の主題を検討させ、歴史を身近に感じさせようと興味ある身近なものを挙げさせた。主題の例として「エネルギー資源の歴史」と「お金の歴史」(第4図)を例示した。

(2)第2時検証授業

調べてみようと思う主題を決定する上での注意事項を次のように示した。

ア 幾つかの時代にまたがるものであること

コンピュータや電気製品の歴史になると近現代のみの年表になってしまうため、道具については有史以来のものになるように指示をした。例えば「洋服の歴史」と主題設定した生徒に対して、洋服が日本に入ってくる以前にも着目させて「衣服の歴史」にすることで多くの時代にまたがるようにした。

イ 細くなりすぎないこと

あくまでも歴史を大きくとらえることが目的なので、詳細な部分にとらわれて、網羅的な内容になりすぎないように指示をした。

ウ 主題の条件を揃えること

同じ条件の下での変化になるよう注意して、調べる

主題の条件を揃えて主題を設定するよう指示をした。例えば「衣服の歴史」を調べる場合に、身分や性別が混在すると比較が困難になるので、注意を喚起した。

以上の点に注意して「調査計画書」(第5図)を作成させ、主題や調べ方に対して助言を加えた。

身近なモノの歴史調べ 計画書	
2年 組 番氏名 _____	
主題の名称	主題の名称
調べたいと思った理由は	調べたいと思った理由は
どんなことを調べたいか	どんなことを調べたいか
調べ方と資料の入手方法	調べ方と資料の入手方法
アドバイス	アドバイスと提出日
提出日 〇月 〇日 ()	

第5図 調査計画書

生徒の設定した主題は「衣食住に関するもの」、「遊びやレクリエーションに関するもの」、「医療に関するもの」、「スポーツに関するもの」などであった。生徒はこの計画書に従って冬休み等の時間を使って、歴史の資料集やインターネットから自分の主題に関する資料を収集し、事前に配付した年表のフォーマット(第6図)に書き込む形で年表を作成するようにした。配付したフォーマットは、第3時の授業で生徒作成の年表を比較できるように、時間軸を等尺にし、共通のものにした。また、作成した年表に対する生徒の考えを知るために、ワークシートを用意して以下の点について記入させた。

- ものの移り変わりを見て気付いたこと
- 他に調べてみたいこと

特色																					
時代区分	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	室町	室町	江戸	明治	昭和	平成	令和					
年代	1年			500年			1000年			1500年			2000年								
世紀		6 C	7 C	8 C	9 C	10 C	11 C	12 C	13 C	14 C	15 C	16 C	17 C	18 C	19 C	20 C	21 C				
組 番 氏 名																					

第6図 年表のフォーマット
(印刷の都合上実際のものを簡略化)

(3) 第3時検証授業

様々な面から見た歴史の流れを比較できるように生徒作品の中から、例として衣服がテーマのものや食事がテーマのものを選び、それぞれテーマ別にまとめて上下段に並べた。さらに事象の因果関係や各時代の背景を知る手掛かりとして、外国との関わりと日本の戦乱の年表(以下「比較シート」という。)を用意した。これらの年表を並べてプロジェクトで提示できるようにした(第7図)。

この年表を使って時代の移り変わりに気付かせ、歴史を動かした要因を考え、時代背景との関連に迫るために次のように授業を展開した。

- 衣食の歴史で大きく変化している箇所はどこか挙げてみよう
 - その変化をもたらした原因と考えられる項目を外国との関わりから挙げてみよう
 - その時歴史を動かしたものは何だったのか考えよう
- 以上の項目を班で検討して発表させた。

衣のテーマ	貴顕衣 鎌倉侍人伝	聖徳太子 すいかん	水干	束帯	直垂	小袖 (箱物の原型)	半纏・法被 織田信長	庶民	ズボン スカート
食のテーマ	1億人 5000万人	石包丁 高床式倉庫	肉食なしで 1日2回	肉食味噌 汁で1日3回	肉魚味噌 汁で1日3回	携帯食料	新田開発 一汁二菜	西洋料理 西洋風アレンジ	西洋料理の 日本風アレンジ
外国との関わり	稲作が伝わる	遣唐使 仏教が伝わる	遣唐使 遣唐使廃止	元寇	日明貿易の開始	キリスト教伝来	銀国が完成	ペリー来航	ポツダム宣言
特色	陸続き	朝鮮半島との交流	中国模倣の時代	日中融合から 国風の時代	ヨーロッパ	日本独自	西洋模倣		
時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町

第7図 衣と食の歴史

どの班も明治時代の大きな変化を挙げて、現代生活にまで至る生活様式の欧米化のきっかけは、ペリー来航の結果、開国によるものと改めて理解した。この変化以外にも、A班は食事の回数が増え、栄養のある食事の中身に变化した箇所に注目し、そのころの衣服が活動しやすい服装に変化していることなどに気付き、貴族から武士の世の中へと変化していることをとらえていた。

また、B班は江戸と明治に人口が増加したことに注目し、それぞれの原因を追及した。江戸時代前半の人口増加は新田開発にあると考えた。そこで第7図の比較シートを外国との関わりから戦乱の歴史に変更することにより、長い戦乱の世が終わり大規模土木工事が可能にした江戸の時代背景に迫ることができた。

このように検証授業では衣と食の年表を取り上げ、外国との関わりと比較することにより、生徒の気付きを引き出した。また、比較シートを他の主題に換えることで、B班のように、多様な気付きを引き出すことができた。

以上のように、生徒に共通のフォーマットで年表を作成させることにより、当初のねらいである次の2点を達成することができた。

ア 主題の異なる年表を比較することができた

年表の時間軸が揃っているので簡単に並べて比較することができた。

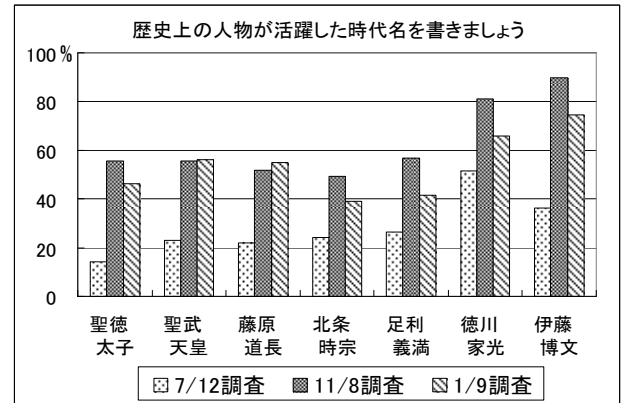
イ 比較シートを換えることができた

比較対象を別のものに置き換えることで視点を変えて年表を眺めることにより、様々な見方が可能になり新たな気付きを促すことができた。

5 検証授業の分析と考察

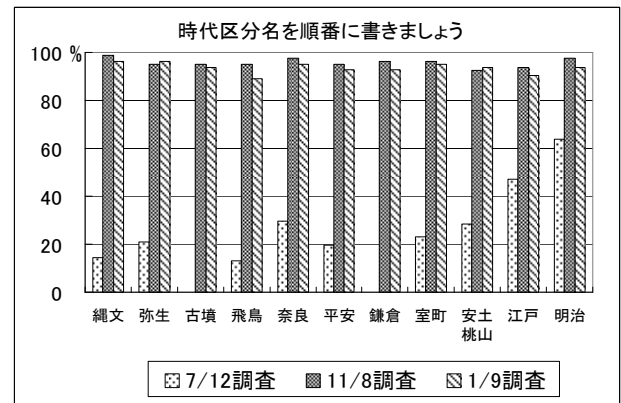
(1) 時代区分に対する理解の変化

時代区分などの基礎的な知識についての調査(7/12に実施)を検証授業後(11/8及び1/9に実施)にも行い、その結果を比較した。



第8図 歴史上の人物が活躍した時代の正答率

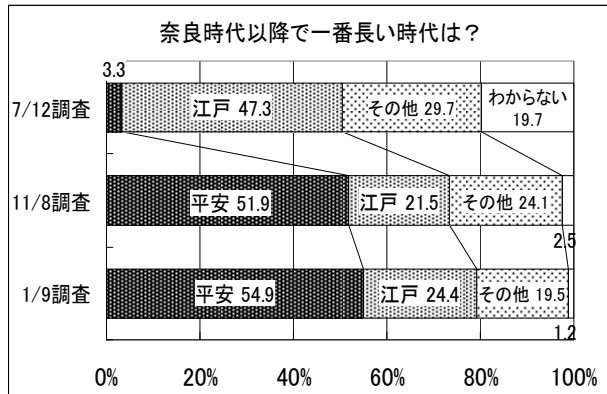
歴史上の人物が活躍した時代を答える質問に対して、正答率としては課題が残るものの、第8図のように7月の調査に比べて改善した要因は、授業で繰り返し年表を活用したことで、時代区分の概念が身に付いたためであると考えられる。これは、時代区分の順序とともに時代の特色を伴った時代認識が定着したものと思われる(第9図)。



第9図 時代区分の順序の正答率

(7/12調査では古墳と鎌倉をあらかじめ提示したためデータなし)

「歴史上のいろんな出来事は、適切な時代区分というものをもとにして考えると、とてもよく理解することができる」(板倉 1981)と考える。授業では時間の目盛りの長さが等しい等尺の年表を活用したため、時代区分の順序を認識しただけでなく、各時代区分の長さについても正しく理解できるようになった。奈良時代以降の最長の時代を答える質問では「平安時代」と正しく答えた生徒の割合は3.3%から54.9%に改善した(第10図)。



第10図 時代の長さの正答率

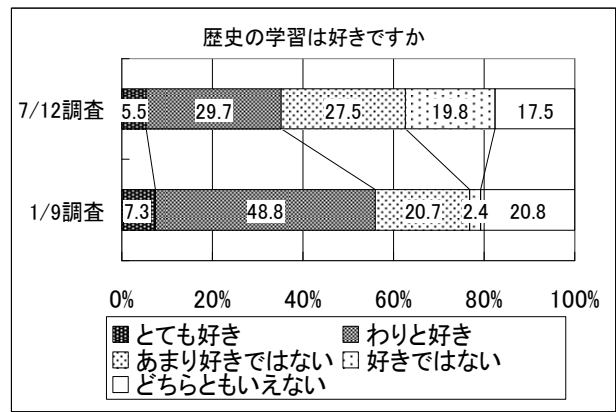
この調査結果で「わからない」と答えた生徒の数が19.7%から1.2%に減少したことも、生徒の中に時代区分をある程度把握して、認識できるようになったためと思われる。これも成果の一つと言えるのではないだろうか。ただし、依然として約4分の1の生徒は平安時代より江戸時代のほうが長いと思っていることは今後の課題としたい。

生徒が年表を作成している時に、「書く内容が多すぎる時代と全然書くことが見つからない時代があって書きづらかった」との意見も聞かれた。時間の目盛りが等しい等尺の年表に記入させたために、大部分の生徒が近現代の事項を記入するスペースが足りなくなっていた。このことを生徒自身が身をもって経験したことで、教科書の折込み年表はなぜ等尺になっていないのかを理解することとなった。歴史の授業で様々な年表を使用するが、年表を比較する上で、時間軸の目盛りにも注意を払う必要があることを気付かせた。これは地理的分野で2つの地図の面積を比較する際、それぞれの縮尺や図法に気を付けることと同様である。

(2) 歴史学習に対する意識の変化

歴史学習に対する意識について調査(7/12に実施)を検証授業後(1/9に実施)にも行い、その結果を比較した(第11・12図)。歴史学習への好感度は、35.2%から56.1%へと変化している。

この要因として、第一に歴史学習に対する基本的な理解ができたことがあげられる。「わかることが意欲喚起の最低条件であり」(北尾 1984)、時代区分の順序や長さを正しく認識して、歴史の大きな流れをとらえた



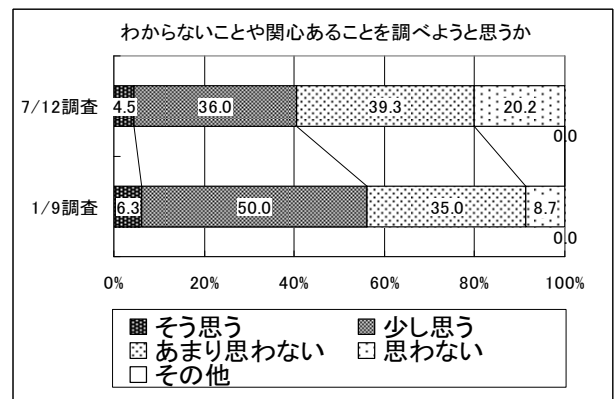
第11図 歴史学習に対する好感度

ことで、断片的であった様々な歴史事象が、歴史の流れの中に位置付けられるようになったと思われる。第8図の歴史上の人物がどの時代に活躍し、その時代はどのような時代だったのかを大まかに理解できたことが、好感度の向上につながっていると考えられる。このことは「ごちゃごちゃでわからなかったことが整理されて、歴史の流れが分かった」というように、歴史の流れの中で人物や出来事をとらえることができるようになったという生徒の感想からも伺える。

第二に歴史を探究することの意義の理解である。「歴史は覚えるのが大変」や「昔のことを勉強しても意味がない」などの感想が7月の調査で見られたが、検証授業後の感想では「自分で調べてみるといろいろなことが分かって面白かった」、「現在の豊かな生活は昔の人の努力の結果に支えられていることが分かった」というように主体的に歴史を学ぶことの大切さが分かったことを示す感想が見られた。

歴史を主体的に学ぼうとする意欲は「他のテーマについても調べてみたい」という感想に表れた。自分の主題を調べた結果、歴史に対する新たな疑問や関心などの「気付き」が生まれ、調べてみたいという意欲につながっている(第12図)。

この「気付き」は、自分の主題を調べた結果での「気付き」もあれば、授業で他の生徒の作品をプロジェクトで紹介したことによって、異なる主題に触れて生ま



第12図 探求心の変容

れた「気付き」もあった。このように新たな「気付き」を導き「調べてみよう」、「調べたい」という学ぶ意欲を引き出すために、身近なものの変化に目を向けて、生徒自身が主題を設定し歴史年表を作成する学習活動は有効であったと考える。

また、第12図のように「調べよう」と思う気持ちが40.5%から56.3%へ変化した要因として考えられることは、夏と冬の長期休業中の課題として、自分で設定した主題に対する調べ学習を行い、調べ方やまとめ方を学習して、わからないことや関心あるものへの対応方法がある程度身に付けられた成果によるものである。これらのスキルを身に付けた生徒は調べ学習に対しての抵抗感が減り、「調べるのが大変だったがまたやりたい」という意見もでていた。

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 基礎的な知識の定着

検証授業の結果、歴史の大きな流れをとらえるための基礎的な知識となる時代区分の順序や長さについての理解が定着している。第9図のように11月と1月の調査で時代区分に対する知識の正答率が高いままそれほど変化していないのは、第1時の検証授業で確認、習得した時代区分の知識を、調べ学習の過程で活用することによって、様々な意味を伴い確かな知識として定着している。

(2) 歴史学習に対する意欲の向上

歴史学習に対して「覚えるのが大変だ」と多くの生徒が感じている。今回の検証授業は自分で資料収集して調べ、自分で考え、そして年表に表現した。この調べて考える行為を通して、様々なことに気付き、新たな知識を獲得している。覚えるだけでなく、自ら学び自ら考えることの楽しさを感じた生徒も見受けられ、意欲が向上していると思われる。

(3) 学習指導の工夫

ア 共通フォーマットの年表作成

生徒に共通のフォーマット上に年表を作成させたことで、異なる主題の年表を比較することが可能になった。様々な年表を組み合わせると共通点や相違点などに気付かせ、また、時代を動かした要因を探る比較シートを用意して、それを必要に応じて入れ換えることにより、歴史を見る視点を変えることができた。このことで自分の主題と他の主題との関連に気付き、各事象が因果関係を持ちながら、歴史の大きな流れの中に、複雑に存在していることを理解できた。

イ プロジェクタによる年表提示

年表を提示する手段としてプロジェクタによる黒板への投影を試みた。この方法は年表のような全体を見せたい題材や、資料画像やグラフの提示では有効であ

った。また、スクリーンでなく黒板に投影することにより、映し出したものに容易に書き込みを加えることが可能になり、生徒の感想も「見やすかった」と概ね好評であった。

2 今後の課題

時代区分の順序や長さの基礎的な知識は、定着したと言えるが、歴史上の人物の活躍した時代名を答える第8図では、一定の成果はあるものの11月と1月の調査結果を比べると、正答率の下降傾向が見られる。これは人物と関連する事象、時代の様子との結びつきがやや不十分であると言えるのではないか。知識の定着を図るために、人物と時代背景が強く結び付くような指導の工夫の必要をあらためて感じた。

授業で使用した共通の年表フォーマットは、今回は時間軸を等尺のものにした。近現代のスペース不足を補うために、コンピュータ上で各時代にリンクを貼って、時代をクリックするとその時代の拡大版になるように、全体と部分が複合した年表教材の開発も検討したい。

教具の工夫についても、授業の中で生徒の作成した年表を様々な組み合わせるためには、教材提示装置などの教育機器の活用によって即時性を高めて、生徒の自由な組み合わせから新たな気付きを促していきたい。

また、プロジェクタによる年表提示は全体を見せる手段としては有効であったが、部分についての提示の仕方を工夫しなければならないと感じた。年表中の文字や数字を必要に応じて、部分的に拡大して映し出すなどの工夫が必要である。

おわりに

歴史の授業では、現在学習している内容はいつの時代のことで、そのころはどんな時代だったのかということなどを常に意識させたい。そのために年表を活用して歴史の流れを理解することは、歴史を理解する上でしっかりとした座標軸を持つことになる。普段から年表に親しませ、年号を覚えるためのものでなく、歴史学習の道標となるような年表の活用を今後も探っていきたい。

引用文献

- 吉川幸男 2007 「社会科における『知識』とは何か」(『教室の窓 中学校社会』Vol.10 東京書籍) p.5
植村繁芳 1992 「基礎・基本論の検討」(『信濃教育会 教育研究所研究年報』第6巻) p.22
奥田真丈 1992 『絶対評価の考え方』小学館 p.72
板倉聖宣 1981 『日本歴史入門』仮説社 p.101
北尾倫彦 1984 『意欲と理解力を育てる』金子書房 p.90